

南半球便り（その 96）：日本映画祭

11 月 24 日

先週、キャンベラでは毎年恒例の日本映画祭が開催されました。昨年はコロナ禍で予定されていたいくつかの劇場上映がやむなく中止となり、オンライン中心の併催。漸く今年は、盛大なオープニング上映会も可能に。やはり大スクリーンで観る映画の魅力は尽きません。



「日本映画祭 2022」ポスター。

オープニング映画「大河への道」出演俳優たちのポーズが目を引きます

1. 長い歴史

豪州での日本映画祭の歴史には長いものがあります。初回は 1997 年。以来、毎年開催され、今年で 26 回目。2021 年の第 25 回上映に当たっては、劇場とオンラインの双方併せ、全豪で 7 万人以上が鑑賞したと言われています。

今年は、キャンベラを皮切りに、パース、メルボルン、ブリスベン、シドニーでも次々に上映予定。計 14 もの作品が取り上げられるのです。準備に当たってきた国際交流基金シドニー事務所の正野所長以下関係者のご尽力無くして実現し得ない一大イベントです。

2. 切磋琢磨

キャンベラにいと、各国の大使館や文化交流団体が次々と映画上映会を行う光景に接します。私も、大使公邸での設宴や出張の合間を縫って、ノルウェー、英国、メキシコ、韓国等の映画上映会に顔を出し、各国による「売り込み」の実態を観察してきました。

中でも、これまで頻繁に日本大使館と連携してきた英国のトリーデル大使による演出には、「流石」と唸りました。上映作品は、007 の最新作。しかも、招待状に記されたドレスコードには、「ブラックタイ、又は 007 の悪役の服装」などという洒落た但し書き。英国の有するソフトパワーを存分に活用する有様は見事でした。



英国大使館主催「007」上映会の様子
([南半球便り（その 47）：杉原千畝映画上映会](#)より)

3. 映画の力

学生時代、渋谷やグリニッジ・ビレッジでの映画館通いを続けていた私には、映画、特に洋画は単なるエンターテインメントにとどまりませんでした。生きた英語の言い回しに接するだけでなく、人と社会を知るための材料でもあったのです。

実際、アメリカ生活ということ言えば、コロンビア大・大学院での授業よりは、遙かに多くの学びや刺激を「カサブランカ」、「風と共に去りぬ」、「ゴッドファーザー」、「華麗なるギャツビー」、「ソフィーの選択」などの名作から吸収してきた記憶があります。

日本映画も、そうです。日本の情景や風習だけでなく、歴史的経験、ものの考え方について、鑑賞者の理解と共感を深める好個のツールなのです。ナマの日本についてより多くの人に知ってもらおうと映画祭が重要なゆえんです。

4. オープニング

キャンベラでの映画祭のオープニングに選ばれたのが、橋爪功さん、中井貴一さんや北川景子さんが共演する「大河への道」。

江戸時代末期に日本で最初の地図を作成した伊能忠敬の業績をストーリーの中心に据え、現代と江戸時代を行き来する、何とも味な展開です。中井さんと松山ケンイチさんとの軽妙なやりとりには、劇場に詰めかけたオージーからも笑いが絶えませんでした。舞台となった千葉外房の美しい海岸線に見とれる人も多かったようです。



映画「大河への道」より

(橋爪功さん、中井貴一さん、松山ケンイチさんによる現代のシーン)

幕末期に日本沿岸に迫ってきていた西洋列強の脅威に備えて地図を作成するとの志半ばに落命した伊能忠敬の遺志を引き継ぎ、伊能の死から3年後の1821年に大事業を完成させた弟子達。スクリーンの英語字幕では、「unsung heroes」と訳されていましたが、まさに名訳と膝を打ちました。

【オープニング上映会での私のスピーチは、[こちら](#)をご覧くださいませ。】

5. 普通の人たちの力

長年、日本と海外を往来する生活を送ってきて、諸外国と比して日本の最大の力は何かを問い続けてきました。以前、東大に留学していた知人の韓国外交官から、「日本で凄いのは政治家や外交官じゃない。『普通の人』が凄い。」と喝破された時、いささか複雑な思いを覚える一方で、冷徹に日本を観察している海外の目を改めて認識しました。

映画「大河への道」の本当の主人公は、伊能忠敬本人ではなく、伊能が始めた事業を完成させた弟子達。まさに、市井の名も無き「普通の人たち」なのです。目の前の仕事を完遂させようとする不退転の決意と粘り強い献身、細部への目配りと完璧の追求、仲間との緊密な連携と助け合い。日本人、日本社会の特質を余すところなく描き切った作品でした。



映画「大河への道」より

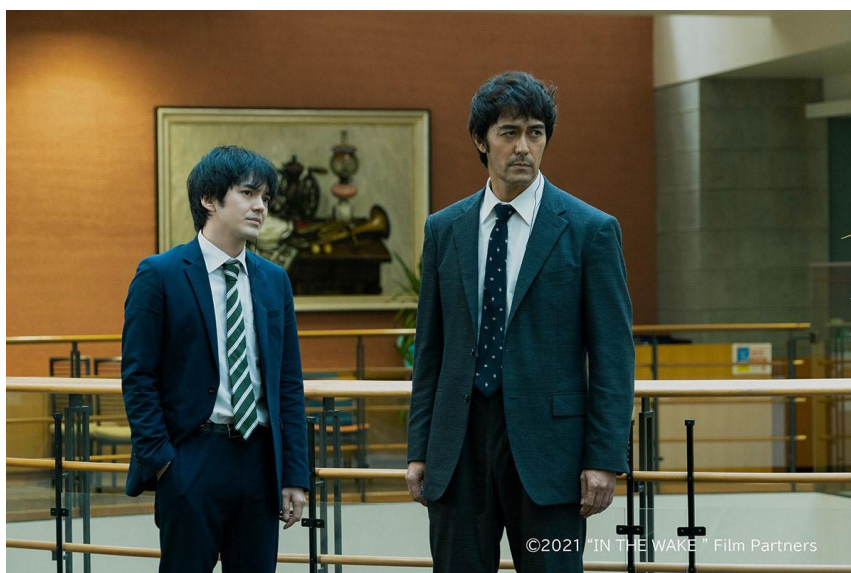
(美しい海岸線を測量する伊能の弟子たちのシーン)

6. 東日本大震災を乗り越えて

「大河への道」に続き、週末には豪日協会の呼びかけに応じ、豪州の知人達と一緒に「護られなかった者たちへ」を鑑賞してきました。

東日本大震災による津波で親族を失い、共に心に深い傷を負ったままに震災後の人生を懸命に生きる主人公達。置かれた立場は、放火犯、殺人犯と刑事と違えども、各人の生き様が 3.11 の惨状とその傷跡の深さを雄弁に語っており、実に胸が詰まるストーリーでした。

被災地出身であろうとなかろうと、日本人であろうと豪州人であろうと、ハンカチ無しには観られない、心の琴線に触れる名作と受け止めました。



映画「護られなかった者たちへ」より
容疑者役の佐藤健さん（上）、刑事役の阿部寛さん（下）のシーン

この映画でも、筆舌に尽くしがたい逆境に直面せざるを得なかった、東北の「普通の人たち」の苦悩、そして周りの人たちへの心温まる気遣いが、存分に描かれていました。

7. 抜群の訴求力

以上、少し気持ちが前のめって筆が走りすぎたかもしれませんが、日本を理解してもらう上で優れた映画作品が持つ訴求力を共有いただけたでしょうか？

その関連でいえば、最近「ドライブ・マイ・カー」を観たという何人もの同僚大使から、「凄く良かった。」との感想を聞かされました。そして、我が意を得たと言うだけでなく、日本人の感性を共有してもらった嬉しさを覚えました。



キャンベラでの日本映画祭オープニング上映会の様子

上は国際交流基金正野所長と

バランスをとることに執心し、揚げ足をとられまいと汲々とするような外交官のスピーチとは違い、俳優の名演と効果的な音響も相まって、異次元の迫力とインパクトを有するのが名作映画。大好評を博したキャンベラ以外の豪州諸都市でも日本映画祭が大きな話題を呼び、名画に惹かれてより多くの豪州人が日本に足を運ぶことを期待しています。

山上信吾